

文学のアナ・ボル論争(2)

秋 山 清

共同戦線の時代

アナ・ボル文学論争の第二回として、早速一九二六年末から一九二七年の数ヵ月にわたる、対立と抗争の文学論を検討しなければならぬのだが、その前に、そのときまでつづいていた「文学におけるアナ・ボル共同戦線」というべきものについて、かえりみておきたい。

一九二〇年の、『労働運動』における共同戦線の破綻を最後として、わが国の社会運動におけるアナ・ボル共同戦線は、文学運動を例外として、存在しなかった。

何故に文学にのみそれがなお存在し得たか。対立抗争する当面の理由ときっかけがなかったからである。ひろい意味での社会主義運動の中で、アナキストとボルシェヴィキの体質の相違というようなものがあつたとしても、文学においては所謂ブルジョア文学との対立の下で、外的にはアナとボルには共同戦線の必要のみがあつた。

明らかにして置こう。このことは、前述平林初之輔の諸論文と、宮嶋資夫の労働文学の主張の間に横たわっている論者の態度の相違——として紹介されているものである。

平林、宮嶋とも「第四階級の文学」という同名の文学論を発表している。二人ともに文学への関心は、労働者階級を主とする社会革命のことと重つての思惟であつて、一九二二年一月に宮嶋は次のような意見をかいている。

「今日まで第四階級の人々は……人生のどん底に繰り返して送るべき運命を余儀なくせられて来た。そして彼等は……或は宿命論的に、或は何物も与えられなかつた彼等が何事も知り得なかつたのを生れながら斯くの如く劣つた素質を有するものかのように欺かれて……然しながら近代科学の発達と共に人は生れながらにして斯くの如く差別ある運命を担わなければならない者でないことを……的確に証明された。……ここに於て彼等は我々の生命を我々に戻せ、我々が生産したものを我々の物たらしめよ、と社会に向つて要求しはじめた。これが近代労働者の精神である。……第四階級のこの要求には、資本主義の道徳が示すような、他人をして自己に隷属せしめなければ止まない、卑しむべき征服欲に燃えた権力的傾向もなければ、自己の悦楽のみを計る利己主義もない。——今日労働階級に身を置く者は……自己の生活を生活する意識まで奪われている。されば彼等は一度この不合理を覚えると共に、自己の生活を自己に返せという極めて小なる要求を提出しただけのことである。然るにこれに対して与えられるものは、××と圧制とだけである。彼等の眼に怨恨の情が燃え、彼等の心に復讐の念が起るに何の不思議があるか？」

その共同戦線が分裂するには、協力を許さざる外的条件すなわち政治的な現実的な条件が必要であつた。その条件の成熟を告げたものとして、青野季吉の「目的意識論」は述べられたのであり、それを契機として直ちに対立抗争の時期に入つたのであるが、ここに私には一つの不満がある。政治的な条件による分裂は止むを得なかつたとして、「文学」についての相容れざる主張の相違、方法論の相違というものは、このときあまり問題視されなかつたのである。「一九二六年秋において、アナ・ボルの文学共同戦線は終結した。」これではあまりにあつけない。そういうものを文学論争とか、文学抗争などといひ得るのか。この思いの一つの救いとなるものは、共同戦線時代における「文学」そのものについての、互いに感じていた異和感の存在、ということである。

山田清三郎の『プロレタリア文学理論の発展』（一九三一年 叢文閣）の中に、第一期の四、として『「アナ」「ボル」理論の対立的萌芽』という興味ある記述がある。「わが国左翼文芸陣営におけるアナキストと、ボルシェヴィキの対立、抗争の理論的萌芽について

——自分の生命を奪われ、自分が×されることはいやであるから、自分は自分の生活したいという要求を社会に提出した時に、更に与えられるものは鉄拳と××と失職とであることを判然と識られた時、彼等のある者が絶望的なテロリズムにまで到るのも何の不思議でもないことである。私は今日の労働階級が、ともすれば赴こうとする××論も、決してそれが×××の為めの××にあらずして、正当防衛、消極的××論であるとして、之を肯定しようとする者である。」（第四階級の文学）

この宮嶋の所論にたいして山田清三郎がこう書いている。

「次の数行（——「自分の生命を奪われ」以下の）は、宮嶋の理論が、明らかにその後発せられた、アナキズム文芸理論の端緒を示していたことを物語っている。」

そしてまた山田は「その頃わが国の労働運動には、アナルコ・サンジカリズムの思想が横溢していたものである。これは一九一八年八月に於ける全国を襲つた米騒動の刺激、一九二〇年の世界大戦後の恐慌における資本の攻勢と支配階級の高圧手段、さらに当時の思想的激流等が労働組合の急進分子を駆つて、極左的、観念的傾向に走らしめたことに由るものであつたが、宮嶋の文芸理論は、うたがいもなくこのアナルコ・サンジカリズムの影響下に置かれていたことは否むことのできない事実であつた」と述べている。

宮嶋は先駆的な大正の労働文学の第一人者であつた。一九三八年に刊行された彼の第一作『坑夫』が現在も忘れ難くその時期を代表する記念的作品であることは周知のことである。しかしその宮嶋の文学的主張を「サンジカリズムの影響下」の一言で決めつけることには賛成し難いのであるが、ここではその山田清三郎のいう「文学

のアナ・ボル理論の対立的萌芽」の相手方平林初之輔の主張を見ることにしよう。

「……プロレタリアの文芸運動……それは階級戦である。階級闘争の決勝戦はただ本隊の××によってのみ決せられる。文芸運動はこのプロレタリア大衆の運動と協調連絡を有しなければ全然無効である。大衆と離れた運動はただ徒勞であるか、或は邪魔になるだけのものである。要するにプロレタリアの文芸運動は、それ自身に絶対意義を有するものではない。そんな相対的意義しかない運動では張合いがないと思う人は、絶対運動に携わるがよい。そして神でも射とめるがいい、太陽でも吹き落すがいい。プロレタリア文芸運動は……決勝力をもたない……一種の補助運動、牽制運動だ。この運動にたずさわる人はあまりに自己の役割を過大視してはならない。しかし大衆運動の一部、圧迫されたものの運動の一員としてたとい隅っこの一部分でも、或は前衛隊の一員でも分担することは光輝あることではないか。」『文芸運動と労働運動』一九二二年

この平林の見解について、山田は次のように述べている。

「しかし乍ら、以上の如き粗雑さや重大なる欠点にも拘らずこれらの理論が、とにかく(一)芸術の永遠性の觀念と闘つて芸術の歴史性及び階級性を明らかにし、(二)芸術運動も階級闘争の一つであるという新なる觀念を打立てることによって、日本のプロレタリア文芸運動の歴史において、最初の組織的役割を果たすと共に、またこれが何れも後に發展した、わが国のマルクス主義的芸術理論の基礎に置かれたもの——」

つまり平林の示した階級芸術論の礎石を山田がかく評価したの

ない。より以上の緊張と精力をもって、反逆精神と階級闘争の目覚めを深刻に、且つ、普遍的にしなければならぬ時代にある。それを今は忘却する時は、常に不安と絶望の目を以て報いられた芸術運動の幻滅を告白することになる。」

「芸術家の第二の任務は、ブルジョアジーの代弁者であるところの、ブルジョア芸術家を葬ることである。」

「以上の事実から見て、最近ロマン・ロランとアンリ・バルビュスとの間に取交わされたボレミックは、共同戦線の今や実質的に効果を挙げようとしている今日の場合に於て真に悲しい現象であると思う。そしてその場合を今日の如き日本の現状に於て想像するとき、僕らは例え日本に於ても早晩惹起す可き問題にもせよ、今日自由と平等の論争をなすことは頗る危険なことだと思ふ。現に僕らの今日為している第四階級の運動も他の国のそれに比してまだまだブルジョア思想には、充分肉薄していない。自由と平等はある形式になって早晩分離するものであるかも知れない。しかしその論争をなすためのほんとうの資格を得るために、先ずもって今は一日も早くあるものの出現のために追撃しつつある第四階級運動のための共同戦線の実を今少しく挙げよう。」

アナ・ボルの共同戦線、それを、多くの同志の反対を押しきって労働運動の上に実行した大杉栄が、その失敗を覺つて中止したのが一九二二年であった。にもかかわらず文学では、『種蒔く人』の社説のように、「自由と平等は早晩分離するものであるかも知れないが、その論争をなすためには、一日も早くあるものの出現のため、第四階級運動のための共同戦線の実を今少しく挙げよう」といい、アナキストたちは同僚として、あるいは協力者としてそこに同居難

は、宮嶋資夫によって示された、階級闘争の時代にも文学は個人的情感に依拠する、すなわち、自分が×されることはいやだから、自分は自分の生活したいという要求を社会に提出する、という被圧迫階級者の意欲の根本に横たわるものを重視しようとするこの対立を、逸早く示したものである。

(その二年後には正面切つてのアナ・ボル文学論争に入るのであるが、山田清三郎がこのとき不十分に与らえたアナキストの文学主張は、アナ・ボル論争の時期にも、不十分にしか理解されなかったものであることを、特にここに記しておきたい。文学のアナ・ボル論争は、アナキストの側から見ると、いささか歪んだ形で展開したものであったが、そのことは現在に至ってもなお尾をひいている。)

平林初之輔と宮嶋資夫の意見にみるように、アナ・ボルの文学的対立は、ここにはつきりとその萌芽を気づかれていながら、なお左翼的文学運動としての共同戦線はつづいたのである。

『文芸戦線』の前身というべき雑誌『種蒔く人』(一九二二—一九二三)の社説として掲げられた「芸術運動に於ける共同戦線」(一九二二)にはこういう見解が述べられている。

「芸術運動に共同戦線なるものがあるか。僕は思う。明らかにある。そしてまた、なければならない。現に最近日本の文壇の問題になった階級意識の主張は観方によっては明らかに期せずして一致した共同戦線の運用であった。おそらく、多くの運動が当分守勢的立場にある中に、最近の芸術運動はどともかく攻勢的態度を示しているものはない。といって、僕らが冷静にその運動の今日までの効果を考える時、まだまだ、かりそめの樂觀は許され

居していた。このときの、文学における共同戦線とは何か。それは芸術論ではなく、文学政策論にすぎなかった。第四階級—無産階級の文学者の力が弱くから当分いっしょにやろうじゃないか、である。次に来るものは分裂—力弱い者と少数者の放逐である。共同戦線をいい立てて、やがてアナキストを除名した、といってボルシェヴィキ派の悪らつを喚び立てる者の方が間抜けなのである。政治とか政策とはそのようなものでしかないのだ。独裁と権力、政策による離合集散、を非プロレタリア階級的なものであるとして非難したことを忘れ、共同戦線に足場を求めた当時のアナキスト派文学者をこそ、非難さるべきである。

宮嶋と平林の第四階級文学論に予見されたアナ・ボル文学論の対立と、この共同戦線の主張とは、一九二二年の出来ごとである。共同戦線に加わったとき、それを主張する者にも、加わる側(アナキスト等)においても、文学論や芸術論によるものの如くに錯覚していたかもしれない、という手ぬるい理解は許されない。アナキストの側もその一時的政策的協力なことは、革命論、労働運動論、さらには文学論を通じて、覚悟せねばならぬ時期であったのだ。

(ここで逸早く私見を披瀝しておきたいことがある。文学の共同戦線論に付する文学観についてである。民衆、プロレタリアあるいは農民等無産階級解放のための文学、またはその文学論、とは何ものであったのか。ボルシェヴィキはプロレタリア階級の手に国家権力を奪取するためにあらゆるものを目的完遂の手段化する。文学に芸術的価値を認めるよりも、民衆にたいする宣伝運動のための目的によって必要化した。当時はアナキストも解放の目的は究極一つだ、ということ、それへの文学者の協力を可能

た。

この「赤と黒運動第一宣言」の言葉を、現在に立てかえりみると、ロシア革命から五十数年をすぎた経験は、その言わんとするところにある正鵠を感じることもできるが、当時はまだ多くの人々に受け入れ難いものであっただろう。ある人々は自分の中の理想主義をロシア革命とボルシェヴィキに仮託して信じようとしていた。「資本主義の延長を計っているボルシェヴィスト」なんて、とても首肯し得るものではなかっただろう。ある人々とは、マルクス主義的社会主义者と、その同調者たちのことである。「赤と黒」のこの運動宣言から三年後の雑誌『驢馬』の第五号（一九二六年九月）に中野重治が「無政府主義者」という詩をかいた。

僕らはある重大な演説を聴いていた

僕らはみんな熱心に聴いていた

時々僕らは激しい拍手を送った

その時僕らのそばで

髪の毛の長い一団の男がいて

間違つた言葉と卑しげな野次とを止めどなく飛ばした

それらの言葉は

どこか一種の政治家に似

ごろつきに似

またどこか縁日の商人に似ていた

〔無政府主義者〕

この「ごろつき」「縁日の商人」というような形容はアナキスト

と見たのであるらしいが、それが芸術、文学の運動ではなく政治的運動でのみあると認識した場合は、協力は当然不可能でなければならない。無産階級の立場から、ブルジョア芸術打倒を目的の協力であったとすれば、その暫定期間の芸術論は一つであるか、近いものでなければならぬ。とすれば宮嶋資夫によって示された「自分の生活を生活したいという要求」に根ざす文学の主張とは背離することになる。でなくば文学共同戦線の時期の、アナキストたちには文学理論がまるで無かったということになるか、アナキ・ボル対立以前の人道主義的な階級感覚しかなかったことになる。いくら役立つかは利用もされたが、不要となつては放り出されるという仕末になったのも、このような文学的無理論の故であつたかもしれない。

私はもう一つ、当事者たちがあまり意識はしなかったかもしれない、まだ共同戦線の時期の詩人のアナ・ボル対立に触れておきたい。

雑誌『赤と黒』（一九三三年五月）第二号の「赤と黒運動第一宣言」のなかに次の言葉がある。

「あの労働者をしきりに説き回っている男は誰だ？ あれか？

あれはボルシェヴィストさ！ あれは労働者を科学と機械の奴隷にしようとしているボルシェヴィストさ！ 資本主義の延長を計っているボルシェヴィストさ！——」

もうこれは五十年近い昔がたりになるが、『赤と黒』は萩原恭次郎、壺井繁治、岡本潤等による、当時もとても激烈な否定精神をふりかざした詩雑誌であつた。前衛芸術の主張に立ちながら、彼らはアナキストを自称するものの如く、ボルシェヴィキに非難を向け

の受とりがたしとするとところであろう。中野のこの詩における「無政府主義者」の表現を私はかならずしも、為にする出鱈目な表現とのみは思わない。「間ちがった言葉」「卑しげな野次」もまたその時期として、あつたかもしれないと思う。しかし『赤と黒』の「労働者を科学と機械の奴隷にする」「資本主義の延長をはかる」のがボルシェヴィストだということが、彼らに受取り難かつたであろうように、中野の詩における「無政府主義者」とはす言葉が「間違つた言葉と卑しげな野次」でしかないということ、アナキストの受け入れ難しとするものでなければならぬ。われわれには何となく、誰もが首肯するものはこれだ、という常識化した判断というものにつきまとわれることがある。それはいつも現状や習慣への妥協とともにある。その常識は、『赤と黒』の宣言のなかの「ボルシェヴィスト」も、中野重治の詩のなかの「無政府主義者」の表現をも、ともに行きすぎた表現のように思わせる。つまりそれぞれ自己の立場を絶対視して対者に向うから、相手は全否定の対象としかならない。（無論私は全否定しようとするこの態度を全否定するものではない。新しい解釈、より正当な判断は、常識的・二元論的な理解からは生れないことを私は信じている。）しかし、これまで私が見てきたアナ・ボル論争はいつもこのような姿でしか残っていない。そこにあるのは相手を否定しつくそうとする情熱のみであつて、相手のいい分をいくらかでも理解して、それをとって以て自家の主張をより稔りあるものにしようとするものではなかつた。そのことはその後につつた文学論争においてもまったく一つであつた。

はしなくも私の記憶に在る『赤と黒』のボルシェヴィキ論と、

『驢馬』誌上の中野重治の詩「無政府主義者」は、ともにそのことを余すところなく示した。つまり対者への理解をないがしろにし、理解不足をほとんど恥じない無責任な態度で論争が展開されるしかなかったということである。この詩における中野の、無政府主義者への理解があまりに世間ありきたりのものでしかないことに、おどろき失望したこともあつた。「この詩に描かれている無政府主義者というものはごろつき以外のものではない。それはごろつきでしかないものを描いて、それを無政府主義者だといっているのと同じことである。諷刺的にではなく、正直に、このような者を（誰が考えてみてもごろつきでしかないものを）それを無政府主義者だといつたのだとすれば、中野の理解は世間ありきたりの、戦前天皇国家の善良な臣民どもの、自分の目と心で判断したことのない、借り物の意見とえらぶところがない。」ということを書いたこともあつた。同様に『赤と黒』運動宣言の「労働者を説き回っている彼らは、ボルシェヴィストさ」というような表現にも力がない。これら双方とも先入観の受売りにすぎないからである。

文学の共同戦線論は現実の課題として在った。その肯定も否定も、それぞれの立場から、政治的政策的にか、反政治的反政策的にか、もつと究めらるべき時期であつたと思う。いつてなければ私はこういいたい。「相手をも、自家の思想的根拠をも、理解不足だつた。『種時く人』の共同戦線論も『赤と黒』のボルシェヴィキ非難も中野重治の無政府主義者への理解も、それらの不足に伴うものであつた」と。

やがて共同戦線論も理解不足の相手非難も終結とならざるを得なかつた。その時の到来が、青野季吉の「自然生長と目的意識」（一

九二六年)をきっかけとしたものであったことは前回に記したとおりである。この戦線の終末は、統一戦線(日本プロレタリア芸術連盟)からアナキストの排除を主張したボルシェヴィキ側のうごきによって、ようやくその時に至った。

文学のアナ・ボル論争——当然もつと早く、もつと真剣に争われなければならなかった論争は、一九二六年秋からその日程に入ったのであった。

『新潮』『都新聞』における論争

一九二六年(大正十五)九月号に発表された青野季吉の評論『自然生長と目的意識』に刺激されて、その秋から急速に対立を表面化したアナキストとボルシェヴィキの文学論争は、その翌年の前半にかけてかなり活発にとり交わされた。

最近入手し得たものによるその一覧表をまず掲げてその検討と回顧に入りたいと思う。論争はここに集めたもの以外にも『解放』『原始』等の雑誌や『読売新聞』『朝日新聞』等の紙面にも記憶されるが、以上の資料だけで大要を求めることはできるかと思われるので、一応これによって考えてみることにした。

アナ・ボル文学論争一覧(A)

- | | | | |
|-----------------|---------|-------|-------|
| (1) 自然生長と目的意識 | 一九二六・九 | 文芸戦線 | 青野 季吉 |
| (2) 超個人主義文学 | 一九二六・一二 | 新 潮 | 新居 格 |
| A 知識階級詩論 | 一九二六・一二 | 詩 文 学 | 小野十三郎 |
| (3) 共産主義党派文学を評す | 一九二七・一 | 新 潮 | 新居 格 |

- | | | | |
|-----------------------|-----------|-------|--------|
| (4) 自然生長と目的意識再論 | 一九二七・一 | 文芸戦線 | 青野 季吉 |
| B 共同戦線の崩壊 | 一九二七・一 | 文芸公論 | 小野十三郎 |
| C 自然生長と目的意識 | 一九二七・一 | 原 始 | 小野十三郎 |
| (5) アナキストの観点から | 一九二七・一・九 | 都新聞 | 新居 格 |
| (6) 文芸上のアナキズムとマルキシズム | 一九二七・一・一二 | 都新聞 | 蔵原 惟人 |
| (7) 組織論—— | | | |
| 再び新居君に | 一九二七・一・一七 | 都新聞 | 藤森 成吉 |
| (8) アナキストの観点からを讀んで | 一九二七・一・一九 | 都新聞 | 田口 憲一 |
| (9) 組織と自由 | | | |
| 蔵原さんの蒙を啓く | 一九二七・一・二二 | 都新聞 | 望月百合子 |
| (10) 強権の否定かブルジョアへの降伏か | 一九二七・一・二八 | 都新聞 | 蔵原 惟人 |
| (11) 真実と自由の為に | 一九二七・一・三一 | 都新聞 | 望月百合子 |
| (12) 所謂マフノ運動とは | 一九二七・二・三 | 都新聞 | 田口 運蔵 |
| D アナキズムの反動化 | 一九二七・二 | 文芸戦線 | 末永 茂喜 |
| E 行動と示唆 | 一九二七・二 | 詩 文 学 | 小野十三郎 |
| (13) 政党と文学 | 一九二七・二 | 新 潮 | 蔵原 惟人 |
| (14) 新居格氏の無政府主義文芸論を駁す | 一九二七・二 | 文芸戦線 | 小堀甚二 |
| (15) 共産主義党派文学を評す | 一九二七・二 | 文芸戦線 | 文芸戦線社説 |
| (16) 社会主義文芸運動 | 一九二七・二 | 文芸解放 | 川合 仁 |
| F 目的意識の幽霊 | 一九二七・二 | 文芸解放 | 麻生 義 |
| G 文芸運動の新転機 | 一九二七・三 | 文芸解放 | 小野十三郎 |
| H 作品が価値を決定する | 一九二七・三 | 新 潮 | 新居 格 |
| (17) 文芸的機能と政党 | 一九二七・三 | 新 潮 | 新居 格 |
| I 共産派の備兵に与へる書 | 一九二七・四 | 文芸解放 | 麻生 義 |

(1) 無産派文学理論批判

——アナキズムの視点から

(2) マルクス主義文芸観について

一九二七・四	新 潮	麻生 義
一九二七・五	新 潮	青野 季吉

ここに集めた二十七の論文を、とりあえず数字によるものとA B Cによるものと二群に分けてみた。まったく便宜的なことではあるが、論争を跡づけるための止むを得ない整理である。つまりここではまず時間的な順序によって並べ、その中で雑誌『新潮』と『都新聞』における論争を第一群とし、その他を第二群としてみた。論争の根本的な性格には区別はないが、その展開が、こうしてみた方がわかり易いと思ったからであり、また些少ではあるが論争のテーマの運び、あるいは流れのちがいがこの二つにはあるようである。そしてその最初に、『新潮』『都新聞』における論争をとりあげてみる。

「自然生長と目的意識」論による排撃的な挑戦にたいする直接の反応としてはなかったが、この論争の第一群のトップは新居格の、(2)「超個人主義文学」である。それは藤森成吉がその前に『読売新聞』に発表した「超個人主義文学余言」についての質問から発していた。目的意識論が政策的であったに比べて、「超個人主義文学」の問題は、より文学的論争たるべき要素をもっていた。新居はそこでこう云っている。

「藤森氏が超個人主義文芸を唱えるのはいい。だが、個人主義の何もかもを大づかみに一しょくたにしていることには賛成ができない。アナキストは個人主義者ばかりであるとは限らない。アナキストを個人主義者でありプチブルジョア的だとするのは労働

ロシアの口吻だ。(以下傍点秋山)

「アナキストにもタワリシチーの精神はある。だからタワリシチーの意識は何も共産主義の専売ではない。アナキストは社会を無視する個人主義者ではない。スチルネルでさえ自我人連盟の所説で実にうつくしい自我交響の社会を認めているではないか。個人の自由にも重きを置くことは社会の無視を意味しはしない。ただ共産主義者の如く、社会を神の代りに奉らないだけの話である。——マルクス主義的文芸論でないから超個人主義的でないとは云えない。資本主義的個人主義にたいする攻撃をそのまま無政府主義に振り向けるならどうかしている。」

これらの新居の発言は自由主義者としてのその後の彼の主張や反論に終始した主旨によっている。それをいっそう具体的に述べたものとして次の言葉がある。

「私はプロレタリア文学論の一分野として共産主義文芸論の存在を否定はしない。しかしプロレタリア文芸がそれを描いて外にないかの如き口吻には不賛成である。共産主義的文芸は共産主義社会思想を当然反映する。詳述はここでは出来兼ねるが共産主義文芸論には支配と強制との思想をも当然に持つ。」

彼はアナ・ボルの文学における対立を当然とし、「プロレタリア文学の一分野としての共産主義文学のあることを否定しない」という。各々の世界観に立つて文学もそれを反映することの自由を主張したのである。もしこの発言が受け入れられたとしたら次に来るものは、作品の出来如何、すなわちBの世界観に立つてのAの世界観による文学の否定ではなく、芸術作品としての優劣またはその判別ということになる。そのような考え方だから新居格は葉山嘉樹

の「淫売婦」の出現を賞讃したのである。

さて、このとき新居が藤森の「超個人主義的文学主張」にたいして為した論難は個の自由ということに拠っていた。国家や党の政治的方針や主張に従って個人の思考までが圧殺されてはたまらない、といったのである。さらに、藤森の個人主義的なものの否定のなかに、アナキズムを含めて、いやそれこそ目の敵とするものがあったから、新居の意見は書かれたのである。だから「マルクス主義的文芸論でないから超個人主義的でない」とは云えない。資本主義的個人主義にたいする攻撃をそのまま無政府主義に振り向けるならどうかしている。「プロレタリア文芸論はマルクス主義の尺度に拠らなければならぬ理由はない」などといったこともあったのである。

これにつづけて新居格は藤森、田口に宛てた(5)「アナキストの観点から」を『都新聞』の紙上で三日にわたって書いた。(この以前に藤森その他から前記『新潮』の論文にたいする反論が出たらしい)そこで新居は、

「藤森君は、現在のアナキズムは思想としては資本主義と共産主義との中間に位置するに過ぎない、という田口君は、アナキズムはプロ、ブルならぬ独立の中間階級を認める錯覚だ、という。僕はあべこべにコミニズムこそ資本主義とアナキズムとの中間に位置するに過ぎないといいたい。資本主義組織がある。これはボルもアナも共に敵だ。だがその後が問題である。——」

「僕は三つのイズムは三つのものだとしている。所がコミニニストはアナキズムの社会を理想とし、そこに至る過渡期としての権力と独裁とを認める。——そこでアナキストを兎角に邪魔物

あつかいにして中間的存在にし、もしくはブルジョア理論の変容だとするのである。」

この議論がそのままでは、いくつかのアナ・ボル論争に見られたように、世界観の争い、革命過渡期の権力とその独裁について、ロシア革命の経験によって各々の立場に立って非とし是とするだけの論議に終らざるを得ない。だが新居格は問題の焦点を、ともかく文芸のことに引きもどそうとする。

「藤森君は共産主義文芸論は政治と異なり支配と強制とは無いという。その通り、全くなかならねばならない訳であるのに、事実そうでなく、その点はウォカースモンスリー所載のレーニンの文芸論を読んでもければ、直ちにレーニンが如何に文芸の上に支配と強制とを以て臨んでいるかを知られるであらう。」

「田口君がマルクス主義に即して社会と個人、社会と『個人の自由』とについて論議していることはその範囲内では明瞭である。同君によれば社会なき個人は無意味でありとし、マルクス主義に立脚しない文芸論は超個人主義文芸ではあり得ないとするのである。だが僕はアナキズムは個人の自由に関心もするが無政府共産の社会が万人的なもの、社会連帯的なものであると信ずる限り、その点を反映する超個人主義文学があることの否定にはならない。」

「アナキストが個人主義的アナキズムの徹底から本質に個人主義的であることも認めるが、無政府共産主義の包蔵する超個人主義文芸論の成立も肯定しないわけにはいかない。アナキズムに個人主義的なそれと共産主義的なそれとがあることをハッキリ分ち

といて、やはりこの論争では文学論よりも、社会思想の面にポイントが、新居格といえども、重んじられて見える。またアナキズムを個人主義的と共産主義的とに分けて考え、個人主義ならざる超個人なるアナキズムをもって、対抗しようとしているところに、当時におけるアナキズムの理論の力弱さを思わせる。個人的、超個人的という二つの思潮が一つになるところ、そこにこそアナキズムの強靱さを感じるべきであるのに、この時期には柔軟な思考者の新居格さえそこがまだ、プチブルなどといわれることに、いくらか途惑いしたかのように見えるのである。

要するに、藤森成吉らにたいして、アナキズムとは彼らの考えるブルジョア個人主義にあらざることを力説するあまり、アナキズムの超個人主義的性格に重きがおかれすぎたきらいが見えたのである。

新居は「超個人主義文学」を論じたその翌月の『新潮』に(8)「共産主義的党派文芸を評す」をかけた。

ここで新居のいうところは、共同戦線から一方的に締出されたアナキストの一人として、いくらかモラリスチックな怒りのようにも見えるが、それはその時期の事情に触れた発言であったと今では見えるところがある。

「コミニズム全盛の日本である。——文芸方面に於てはどうか。——漠然としていたプロ、ブル文芸論は、幾多の論点の対峙から一進展した。プロ文芸運動は第二期の闘争時代に這入ったと云うのが即ちそれだ。その事を換言すれば、そう唱える一派は共産主義的文芸運動に這入ったということだ。青野等のいう目的意識を明確に把握する文芸運動の時期になったということだ。A

系もB系もない、プロレ作家とプロレ評論家を網羅してブル文壇に対抗しようとして成立った日本プロレタリア芸術連盟が、何時の間にか共産主義新聞主催の、無産者の夕べを後援するに至ったことだ。『文芸戦線』を同質的思想即ち共産主義思想で固めたことだ。劇団「前衛座」を組織してその第一回公演にアナキストを軽蔑したルナチャルスキーの『解放されたドン・キホーテ』を出すことだ。プロ文芸即共産主義文芸であるという文芸論にしてしまうことだ。——共産主義思想とプロ文芸とを結合させ、そこで第二期の闘争時代に入ったというのである。」(共産主義的党派文芸を評す)

「私の観点からすれば、プロ文芸即共産主義文芸とはならない。私は無政府主義思想の観点に立つ。

——無政府主義者をプチ・ブルと詭弁して排斥するのは偏狭なる共産主義者の常套手段である。」(同上)

「共産主義への道に追いやらなければ無産派の芸術家でないといえるのは共産主義者の独断である。レーニンの文芸論の如きがその代表的なものである。彼の文芸観はまったく共産主義的政党员の政策論に過ぎない。文芸の本質を無視したものである。

『著作家は何らの条件なしに党に加入すべきである。出版所、書店、読書室、図書館の、文芸に關係あるすべてのものは党(共産党)の支配下に置かるべきである』

『われわれ共産党員は警官の支配から離れたばかりでなく、資本家の影響から、個人的野心から、就中無政府主義者のブルジョア個人主義から離れた新聞を造りたいと思う。』

レーニンの如き共産主義的政治家からすれば共産主義への進行

にあらゆるものを利用することを望むのは当然である。労働組合

は勿論消費者組合も、……新聞も、文芸までも、共産主義的目的意識を持たねば止まないものである。共産党の政治家としての彼の意図は一応うべのう。というのは政治家としての観点に立つてである。労働ロシアは文芸や教育（無産階級教化）を第三戦線とした。それは政治運動の観点からしてそうなるのである。――

文芸は多数の決定によって容易に傾向づけたり従わせたりすることは出来ない、といったながらも、何としても共産党の政策下に置くことを忘れる彼ではなかった。――各人は少しの制限もなく書く自由がある、ただ政党には党に反対する意見を吐く者を放逐する自由がある。文芸も同様だという意味が共産党指揮者としてのレーニンの意見であった。（同上）

新居格のこの意見には、突如共同戦線が失われたことにたいする憤懣もあるが、そのきっかけとなった青野季吉の「目的意識論」があまりにレーニンの受け売りそのものであったことにたいして、また共産主義文学者らが金科玉条とするレーニンに向けるアナキストの理解を示すものであり、党略と文芸とのかわり、それへのアナキストの主張を示そうとするものでもあった。しかし新居の主張の眼目は要約されて次のところにある。

「政略の本質には支配の一面と強制の一面がある。何故に人間には芸術的創造を欲する心理が発生したかの問題は、思想と別存しうる。芸術と思想の関係はずつと後の世になったものである。芸術の機能はブルジョアの帰属でもなければプロレタリアの帰属でもない。階級性をもつ芸術はある。そしてプロレタリアの芸術に階級性がなければならぬことも肯定ができる。階級なき

社会が出現しても芸術はある。そのときにこの最も曲げられない形に於ける芸術がある。芸術の機能はブルジョア社会では勿論、プロレタリア社会でも、帰属によって曲げることは出来ない。手段化して曲げたいところに政略がある。

政略は或る目的を対象として成立つ。無産階級教化は、一つの政略だ。無産文芸運動も政略である。（同上）

「共産主義的芸術家が共産党運動の一輪輻になることは党派文芸となって党略の順使になることではないことを知らねばならぬ。レーニンの如き粗笨なる文芸論の尻馬にのることではないのである。」（同上）

文学におけるアナ・ボル論争が一時熾烈となり、やがて文壇的にアナキズムが地平線下に沈むかに見えるまでの曲折の中で、ここで新居格の発言が触れた重要な問題が、日本の文学運動の上ではほとんど忘れられたことを、私は遺憾とするものである。それは文学の党派性についての考察としてである。レーニンの青野（季吉）的目的意識論への反対を単にアナキストの党派的な反対意見としてのみ理解すべきではなかったのではないかということである。というのは新居格のいう「芸術の機能はブルジョアにもプロレタリアにも（階級的に）帰属しない」という考え方は、大正末の時点でボルシェヴィキの文学論――文芸政策論にアナキストとして反対したばかりでなく、芸術・文学は斯くあらねばならぬという本質論的な問題であった。後にはアナキスト等もこの見解から遠ざかるうとさえするに至ったときがあり、このときの新居格の立場はもう一度深く考え直さねばならぬものを蔵していたのであるが、しかしほとんどそのような性格については再考されるということは、アナキストから

さえもなかった。そのなかったということにおいて、このときの新居の所論はいっそう重要であり、忘れられたことにおいて、アナキズムと文学のかかわりの問題としてさらに貴重なものとなった。

「超個人主義文学」と「共産主義党派文芸を評す」という二つの論文によって、この時期の文学論争のなかで新居格の抱懐するアナキズム文学論はその輪郭を明らかにしている。

それは十分に明確とはいえぬかもしれないが、党派文芸――政治的党派の主張にそのまま従うことを文学に課せうとしなかったことと、まずこれである。いくらか遺憾な点をいえば、アナキズムを個人主義――ブルジョア個人主義だといわれることをあまりに危惧するところから、アナキズムも超個人主義的であると例証することにとである。むしろ、超個人の名による個人の無視にも警戒を向けなければならぬのであり、それを為し得るものがアナキズムでなければならぬ。

新居の二つの意見、「アナキストの観点から」（『都新聞』）には藤森成吉と田口憲一が、「共産主義党派文芸を評す」（『新潮』）には蔵原惟人が、新居と同じ紙誌の上に反対意見を書いた。

藤森・田口（憲）の意見は文学論として今日省みるべきほどのものではない。藤森は（7）「組織論」と題して二回、田口は（8）「アナキストの観点」からを読んでを三回連載したが、その中で田口の理解を紹介する。

「新居氏はアナキズムがブルジョア的のものでない、と主張されるばかりでなく、無政府共産主義ですら、その前に介在する一主義に過ぎないとしている。これらの議論は、当面の文芸論争に

さして関係ないように思われるが、当面の問題がアナキズムの超個人主義性如何の根本部に於て解決せらるべきものである以上輕視し得ない。――もし私に紙面が与えられるならば、この点に關し、決して一戦を辞しないものである――」（『アナキストの観点から』を読んで）

田口のこの意見は新居格が示した、

(1) 個人主義（資本主義的個人主義、個人主義的無政府主義）

(2) 社会主義（共産主義）

(3) 無政府共産主義

という図式に關しての発言であった。ここでは両者の意見についての是非に觸れることはやめる。ただ一言したいのは、逸早く文学をはなれた論争となつていった、ということである。アナキズム対ボルシェヴィズム、その革命思想としての論争、『新潮』から『都新聞』につづいた論争もついにこの型を出すことはできなかった。だから文学論争として味気ないことおびただしいが、何故に文学論としてこのような論争がかくも熱心につづけられたか。それを知るために次に新居と蔵原との論争をふりかえることにしよう。（その論争の跡をたどりつつ、少しでも文学の論争であれかしと念ずる思いがある。）

蔵原惟人が「新潮」二月号（一九二七）に（13）「政略と文学――新居格氏の無政府主義文芸論を駁す」をかいたのは、その前月号の「共産主義党派文芸を評す」の反論としてであった。

蔵原は新居の主張を次のように要約するところからその論争を出発した。

「文芸は政党から独立すべきである。政党に従属する文芸は枯渇する」と。第一は政党に対する氏の誤解、第二は文芸というものの対する謬見（「政党と文学」）

「政党と文芸との関係の我々の見解——階級社会における政党と文芸とは、その純粋なる形においては等しく階級のイデオロギーを代表する。階級社会における自己の政治的社会的権利を主張するために、さらに自己階級の統一と団結をはかるために、その意識分子より成る政治機関を必要とする。この政治機関こそ政党である。政党はかくして階級の前衛的イデオロギーを反映し、やがて全階級の指導の任に当たる。」

文芸も亦他の方法によってその階級的イデオロギーを反映しつつ、その階級の心理を統一し組織化してゆく——ここに階級社会における文芸の重要な役割が存する。（同上）

「今やわが国における真実に無産階級的なる政党の指導者と、真実にプロレタリア的なる作家とは、その反映するイデオロギーを等しくしつつある。そこに強制もなければ束縛もない。ただ真実に無産階級的なる自己のイデオロギーの自由なる発露と、それに伴う自由なる活動があるばかりだ。」（同上）

蔵原はここで、政党が芸術家とその制作を強要、抑制するものではないこと、だから芸術家は自由であることを強弁しているようであるが、はるかな時間をへだてた今日、そのことの実証的論議はもはや必要ではない。私などは、強要し抑制することに常に反対でありながら、その強要と抑制によってのみ政党が文学とかかわる政治的意味を認めることが出来るのではないかとさえ思ったほどである。蔵原はこの反論の終末で次のように結論している。

いにされたばかりか、悲しむべき政策論によって結論づけられようとしている。

アナキストを「プロレタリアを支配階級に売らんとする裏切り者」と断定するのであれば、論争による彼等の所論の発展などは期待しようもない。またレーニンの文芸観について新居が発言した問題などは、蔵原も応答して然るべきものと考えられる。この蔵原の一文を、前掲新居の非難に答えたものとするのは、このような結論が出された限り、すでに出来ないこととなってしまった。

蔵原はその結論で、新居とその他のアナキストをプロレタリアを売る者だ、と断定するより前に、「党はあらゆる異なった団体、潮流の自由競争を宣言する」とか、「党は文学の事に対する手製の、そして理解なき行政上の妨害を、あらゆる手段をつくして排除しなければならぬ」などということをして、一九二五年六月のロシア共産党中央委員会の決議「文芸の領域に於ける党の政策に就て」を引用して語っているが、何故にそのようにして新居の見解に回答、あるいは反論しなかったのでしょうか。そのロシアの党の中央委員会決議は新居の質疑と不信とに應えるところを表面には持っているものの如く見えながら、ただかかる決議がなされた後の共産党の文学指導が、文学者の自由な活動を許したか、阻止したか否か、の疑惑について蔵原には語るところがなかった。決議とその以後の実際についての報告がなされなければ、新居格を否定しきれないではないか。その事実即ちして回答する代りに蔵原惟人が為したことは、党とその文芸政策並びにわが国の共産主義文学運動への反対を述べたという理由に、新居格を階級的裏切り者としてきめつけただけのことにおわった。

「——何故に新居格氏がその不明瞭なる頭脳に頼りて、この論文を書かねばならなかったか、というその社会的根拠についてである。」

それは次のごとく説明される——近來プロレタリアートは末期的、デカダンの小ブルジョアの指導者からはなれて、真実にプロレタリア的なるイデオロギーによって統一され組織されて来るようになった。それとともに小ブルジョア中自覚的な分子は続々としてこの陣営にきたり投じつつある。しかるに一方に大ブルジョアジエは小ブルジョアジエの反動的部分を獲得してこれをファシズムの旗の下に組織化しつつある。この間にあって、一番困るのはあらゆる強権を否定して個人主義的な自我の夢に耽けろ、とする、末期的、革命的な小ブルジョアジエである。——新居格氏のこの論文もまた実にその一つの現われに過ぎない。それは真実にプロレタリア的なるイデオログたち、わがブルジョアジエの目の敵である『共産主義者』の名を付して彼等を陥れ、さらに小ブルジョア俗衆の『神聖なる芸術』の心理に媚を呈することによって、自分たちの失われたる樂園を回復せんとする、彼等小ブルジョア・アナキストの最も卑劣なる最後の冒険であり、それはさらに客観的には、無産階級イデオロギーの発達を阻止することによってわがプロレタリアを支配階級に売らんとする裏切行為にほかならないのだ。（同上）

これはまことに当時新進気鋭の評論家蔵原惟人の所論としては、つらつたるものであり、そのはつ、つ、ただ、いま私をして落胆させる。ここにはまた文学論が殆んどないばかりか、新居格が非難し疑問した重要な彼我対立の焦点となる問題が、論点をずらせてあいま

その同じ月に小堀甚二が『文芸戦線』に(14)「新居格氏を嘲ふ」をかいて蔵原に呼応していたが、

「新居格氏は、其の厚化粧の野卑なる毒舌と銜学の蔭にかくされていた頭の悪さをバクロすることによって、自分自身の穴を掘っていられる。かかる小市民的観念論とヒステリーの漫罵に対して真面目に反駁を加えるのは馬鹿気切ったことである——」
といったような、これまた漫罵的なものでしかなかったが、「我はアナキズムの唯心論を小市民的哲学とするものである。従ってそれによって生まれる芸術を小市民的芸術と呼ぶ。真の無産階級芸術を生むものはマルクス主義的世界観以外にはないことを、確信を以て高唱するものである。」という小堀の断言のなかに、論争が論争であるために不要な、フアナチックで、非科学的な小市民的革命論をこそ見るのである。ここから省みるべき、汲みとるべき何もものもない。

蔵原はまた『都新聞』に(6)「文芸上のアナキズムとマルキシズム」をかいだ。そのとき彼ははっきりと、

「——文芸上の問題とはいえ、結局アナキズムとマルキシズムとの世界観の問題に帰着する。我々も亦ここから出発しなければならぬ。」（文芸上のアナキズムとマルキシズム）

と言ひ、さらに「アナキストに対する、最も現実的な疑問として『非権力状態』と『自由合意』をもつてして、果して現代の資本主義社会を抛棄していわゆる無政府共産主義社会を実現することが可能であるか？」という痛い問題を提出した。蔵原はいう「社会生活上のあらゆる問題はまずそれが実現されるか否かということから論ぜられなければならないからである」と。

(これは中々大へんなことをいったものである。人間的理想の飛躍はこの考えからは抑圧されざるを得ない。実現の可能性が薄いからいつはダメだ、ということになれば、未来にかける一切の夢と期待は軽蔑きわまりないものとしかならない。実現される、ということの目安をどこに定めようか。蔵原の、アナキズムの否定のために、それと対比してボルシェヴィキの革命路線を推奨するあまりの、勇み足では、これはなからうか。)

そして次のことがここの蔵原惟人の意見の骨子であった。
「現代のアナキストがプロレタリアの独裁を恐れること、ブルジョア国家主義を恐れるよりも甚だしい。このことは彼等の攻撃がブルジョアよりも多くコミュニストに向けられているのを見て明らかであるが、これは何を意味するか? 元来独裁は強権を伴う。ブルジョアの独裁がブルに対して何等の強制をなさないと同様に、プロレタリアの独裁は、プロレタリア自身にとって何等強制として感ぜられないはずである。アナキストがこの強制に極力非難の声をあげているのは、彼等がプロレタリアの独裁下に強制を加えらるべき階級の代弁者であることを、プロレタリア階級以外の階級に属していることを告白するものではないか。」(同上)

(これが昭和はじめ頃の、インテリどもの常識だったのであるうか。詭弁でしかないこの言葉のアヤの糸を解いてみたとしてしようもない。「Bは正しい、だからCを討つ。AはBに反対する、だからAはCである」あるいは「BはCを討つために独裁する、Aは独裁を嫌う、だからAはCである」、こんな風な三段論法がプロレタリア文学運動の指導理論家らが蔵原惟人のア

ナキズム批判の中からいくつも作成されることは、われわれのともに遺憾この上なしとするところである。)

要するにこの論文で蔵原がくりかえして説述したところは、アナキストのいう個人主義は小ブルジョアのイデオロギーだということにつきている。この点、前に述べたとおり新居格はそのような非難を避けるかのように、アナキズムを超個人な社会連帯の思想だとくつかえしすぎた。個人の自由がなければ社会的自由なんてウソッパッチだと昭和はじめの日本のアナキストたちはいうほどの自信をもつていなかったのであろうか。「大資本が集中して大ブルジョアがファシズムの傾向を帯び、一方プロレタリアがその組織的中央集権的色彩を強めるとき、小ブルジョアはその何れかの陣営に加わらねばならない。このとき小ブルジョア本来のイデオロギーの『個人の自由』と『強権の否定』を唯一の守護として無政府状態の到来をむなしく期待しているのがアナキストたちである」という思いやりあるこの解説にたいして、「そうだ、そうだよ」といい得る自信と勇気が、当時のアナキストにはなかったもののようである。

このとき望月百合子の(9)「組織と自由」が三回にわたって『都新聞』に掲載されたが、「蔵原さんの蒙を啓く」という傍題がつけられていた。

この過去の一連の論争の報告を買って出た私は、一九七〇年の常識として蔵原の前出の「元来独裁は強制を伴う」以下の個所をも、いささか彼方の意見として、わかりきった手前味噌として、軽く見すごそうとしたが、若く一途だった望月は簡単に見のがそうとしなかった。蔵原惟人が、バクーニン、マフノ、ブルードン等について

与えた批判がここに反批判されているのも、望月の若い情熱であるうが、特に注目すべきは、前記の「独裁と強制」のことである。「プロレタリアの独裁はプロレタリアにとって強制と感ぜられない——」をとらえて彼女はこういった。

「一体どこにこんな独裁が行われているのであろうか? ロシアのボルシェヴィキ独裁を指して居られるか知れぬが、それは大変な錯覚に過ぎない。ロシアのボルシェヴィキの独裁は、プロレタリアの独裁ではない。プロレタリアの独裁でなく、プロレタリアを独裁するのである。少数野心家の専制政治に過ぎないのである。プロレタリアと独裁とは両立することの出来ない性質のものである。プロレタリアとはピラミッド型政治組織の最下層民の事である。プロレタリアにとってはそのピラミッド型組織のボルシェヴィキ社会と、資本主義社会との間に何の相違もないものである。」(「組織と自由」)

このとき望月百合子の登場は、問題を前に進めるかのようであった。新居格の「個人主義と超個人主義の問題」も、革命ロシアの国家権力と資本主義国家の権力とが、権力として同じ質のものでしかないではないかということについても、いささか前にすすめる発言であった。それは、

「アナキストは個人の自由を主張する。しかしながら、それと同時に、個人の社会性を信ずるものである。」(同上)

によく表現されていたが、さらに、問題が世界観、イデオロギーのことから文学のことにかえて来て発言されたことを、われわれは多しうたいのである。

「最後に、こうした強権主義思想を基礎とした文芸というもの

が成立し得るものか、どうか? それは私どもの言を待つまでもなく、文芸家自身がよく了解する所であらう。」(同上)

「自由の精神がない処に芸術はない。生命の表現は自由を条件とする。自由なき生命は死である。自由なき芸術は生命なき芸術である。ロシアにも新しい文芸が起るとすれば、それは現在のボルシェヴィキ政府を謳歌する文芸ではなくて、かえってこの新しい権力階級に反逆する戦いの文芸でなくてはならない。日本の共産主義が浅薄で粗雑な模範精神以上に出でないのは、この徹底せる自由の要求が欠けているからである。」(同上)

望月の意見が、蔵原ら当時のマルクス主義文学者にどう受けとられたか、否、おそらく、その主旨に何らの考慮も払われなかったであろうが、一九六〇年〜七〇年の時代からこの発言を回顧するなら、第二次大戦以後ロシアに現われた新しい文芸が、「この新しい権力階級」即ち共産党の独裁に反逆するものであったことは、今昔の観をふかめるものである。

さて、望月と蔵原の間には『都新聞』の紙上でもう一往復の論争がとりかわされた。

(10)「強権の否定か、ブルジョアへの降伏か」の蔵原と(11)「真実と自由の為に」の望月である。

蔵原の論文には「望月百合子氏の『啓蒙』に答う」という傍題があり、またしてもバクーニンやマフノについての反論が述べられているが、私にはそれは今用がない。ただ最後のところに、前の望月論文の「自由の精神のない処に芸術はない。——自由なき芸術は生命なき芸術である」をひいて、

「百合子氏は俄然としてその大論文を終るに、小ブルジョアその

ものとても云いたい『自由なる芸術』の牧歌をもっている。」と冷評して、さらに曰く「お何という名文！だが……過去の歴史は皮肉にもこう答える。——『自由』のなかった所にも芸術はあった！」と結んだ。

（本当にアナ・ボル文学論争というものがあつたのであれば、この蔵原の結論的な発言のなかの『自由』と、その『自由のなかった所にもあつた』という『芸術』についてこそ、論争によって究めるべき問題があつた筈だ。何が自由であり、何が芸術であるか。それは今日の問題でもあるのだ。）

望月の「真実と自由の為に——再び蔵原さんの蒙を啓く」はこの蔵原の反論にたいするものであつた。その最初に「マフノ運動」にたいして再び語っているが、今日わが国でも、その時読むことを蔵原に望月がすすめた『マフノ運動史』（アルシノフ）は紹介されているから、この問題は見過ごさう。もう一つ望月が力説しているのは、蔵原が真赤なウソだといった、労働ロシアにおける言論統制である。そこに自由がなかったことは、フルシチョフによる雪解け以後にも問題を残しているソビエト・ロシアのことを思えば、これもまた追究する必要などあるまい。

蔵原が「強権の否定かブルジョアへの降伏か」で書いた中で特に望月が引用した箇所を、私もまた引用しておく。

「今や我々の前には二つの道があるばかりである。即ち大ブルジョアと大地主の利益に奉仕して大資本の専制を行うか、或いは無産者の利益とたたえるべき無産階級社会の実現の為にプロレタリアートの独裁を断行するか——一つの道は我々をファシズムに導き、他の道は我々をコムニズムに導いて行く。第三の道はな

いのだ。」

この意見は明快にして、そして独断的である。蔵原のいう第二の道について、望月はこう評した。

「最初計画した共産主義を棄て、国家資本主義に退却し、さらにその勢に駆られて大資本主義が勃興しつつあることを蔵原さんは知らずにいる。ファシズムとボルシェヴィズムが殆んど差異のない状態に陥っていたことを知らずにいる。——蔵原さんは独断的に、第三の道はないのだ、と言われるが、私はあるという。（真実と自由の為に）」

私が望月の意見におおむね近いとしても、文学論争の場における革命論争のくりかえしにはくたぶれる。まったく無駄なことだとは思われないが、やはり文学論を展開して争うまでの文学的実力が、双方ともに無かつたのであろうか。だから私は望月の、最後に述べた次の言葉がわずかに芸術のことに触れたというだけで、今も記憶にのこるのである。

「最後に私が、自由の精神がない処に芸術はない、と云つたに對して、蔵原さんは、自由のなかった処にも芸術はあつた！」と云っている。これは蔵原さんの強権を肯定するブルジョア的奴隸精神から見れば尤もなことである。私から見れば自由のない社会にも自由の精神は活動する。それは反逆となつて現われる。そこに真実のプロレタリア精神が存在するのである。この自由、この反逆の精神こそ、真のプロレタリア芸術の基調でなければならぬ。プロレタリア・イデオロギイを主張する蔵原さんから『自由のなかった処にも芸術はあつた！』という言葉を聞くに至つては最早議論を進める張合もなくなつた。（同上）

一九六九年十二月三十日の午後、西武新宿線の電車のなかで、幾年かぶりの蔵原惟人に逢い、談たまたま『都新聞』紙上の文学論争に及んだとき、彼はいった。「望月百合子にはやられたね。論争で参つたと思つたことは、あの一回だけだよ。」その顔が明るく快かつたので、私は、その「やられた」のが何ごとであるのかに楽しく期待した。いま四十数年ぶりのこの論争を読みかえてみて、蔵原があんな風にいったのは「自由のなかった処にも芸術はあつた……」の問題であらうと思つた。

これは敵をあなどつた蔵原の失言だつた。論ずるまでもなく、行動の自由のない獄中にも芸術は生れる。蔵原は、自由と芸術とのかわりについての望月の発言を至極大ざっぱに「小ブルジョアの『自由なる芸術』の牧歌」として片づけようとした。望月のいった「自由のない処に芸術はない」「生命の表現は自由を条件とする」「自由なき芸術は生命なき芸術である」を、いくらか舌つたらず、いくらかセンチメンタルの如くであつたとしても、支持しなければならぬ。

ある規制に進んで自分を堅持せしめたとき、その人に精神の自由と独立がないとはいえない。「自由のなかったところにも芸術があつた」のではなく、規制と統制の中にも精神の自由が有り得るということである。そのもつとも発らつたものが反逆の精神であり、文学・芸術がその精神の自由にかかわるものたることはいうまでもない。「自由のなかったところにも芸術はあつた」のではなく「自由のなかったところにも自由の精神はあり、芸術があつた」のである。

『都新聞』の紙上には、もう一度④「所謂『マフノ運動』とは

——盲目蛇におしず」が望月への反論として田口運蔵によって書かれたが、語るべきものではなかつた。（一九二七・一・三一）と末尾に日付を付した田口の文章の後に、付記として、『都新聞』編集部から次の言葉があつた。

「藤森成吉氏の『超個人主義文学に就て』から新居格氏の反論となり、続いて蔵原惟人氏、藤森氏、田口憲一氏、望月百合子氏等の間に幾度か応酬が繰り返されましたが、田口運蔵氏の『所謂マフノ運動とは』を以て、此問題に関する論争は打ち切ります。他にも幾通か原稿を寄せられた方もありましたが、制限された紙面に全部採録することは勿論できず、止むなくお返し致しました。此機会にそれらの諸氏の御好意に謝すると共にお詫び申し上げます」（記者）

と如何にも、言いつのり、書きつのりながら前向きな文学論争となりそうもない、連続した悪罵に近い応酬を、持てあましたもののように見受けられた。（一九七〇・八・三一）（つづく）

コンミニストの文芸運動はその名に於いて文芸を冠してはいないが、私をして適当にいひしむれば政治運動である。更にいえば、政党内閣の文芸的暴露というの外はないのである。それならばそれで一つの立場だ。（われわれは反対だが）それはピラとボスターとを芸術的にまで持ち上げ、共産主義思想の宣伝乃至共産党の政略を芸術的に表現したに過ぎないのであるから。その意味に於いて、芸術は副的であり手段化である。芸術を第一義乃至本質的に見ない所に、政党的には第一義の文芸乃至文芸運動があるのである。

新居格「共産主義文芸を評す」